

詩余ものがたり 南宋篇 (二)

— 清・葉申薊『本事詞』 —

松尾肇子

二十一、楊无咎

宋の人が妓女に贈った詞は、多くがその名前を隠して詠み込んでいます。清江の楊无咎(字は補之)が黄瓊に贈った〔好事近〕には次のようにあります。

花の中で美しい黄色い花を愛し、  
瓊の庭でその昔に知り合った。  
思いがけず種々の風流がある中でも、  
国を傾けるほど美しい一枝。

手すりにもたれかかるそれを覆い隠し、  
みだりに摘み取らせはしない。  
それでもどうしようもない年をとって情が減じ、  
満開の春に背くのは。

李瑩には〔滯人嬌〕を贈って言いました。

春の女神を悩ませて、

詩余ものがたり 南宋篇 (二)

千百の花々が目に満ちる。  
ひたすらに愛らしいのは、あの美しい李、  
瑩然とした姿は、

春の思いをたっぷりと独り占めしている。

(仙女も訪れる) 唐昌観の玉蕊花と、うっかり言っではいけない。

雪か霜かと思まがう白さ、  
紅にも翠にもまさって、  
見飽きない、その味わい。  
折れ曲がった闌干の石段のあたりに、  
移植するのがよろしい。  
憂わしげな緑の葉がかげを作れば、  
道行く人が指さすだろう。

二十一、楊无咎と呂倩倩

呂倩倩は名妓で、音楽が上手でした。楊无咎は鄧端友の宴席で始めて会ったとき、「垂糸釣」を贈って次のように言いました。

ほっそりとした玉のような指を半分見せて、

詩余ものがたり 南宋篇(二)

白檀のカスタネットを太鼓に静かに合わせる。

すばらしい調べが響き渡ると、

空をゆく雲も動かない。

どれほどの思いを、

両方の眉に集めて、

だれに訴えようというのか。

氷玉のようなカスタネットを打ち鳴らし

情を交わした雲雨の夢を怨んで

一声一声すべて愁いを含む。

まだ酒の残る杯を置いて、

一座の者はみな驚いて顔を見合わせ、

はらわたも千々にちぎれたに違いない。

その人が立ち去ろうとすると、

美しい軒先に細かな雨が降りかかる。

のちにまた歌を聴いて、「夜行船」を贈って言いました。

酒に酔って袖にはカスタネットをちよつと隠し、

一声一声、夜明けの鶯の初音を聞く。

花は江南に散り落ち、

柳は旅館に青々と茂り、

たくさんの昔の愁い、新たな怨み。

私もいつも聞き慣れているが、

こんなにかき乱されることは、なかった。

調べは短く情は多く、

愛らしく語りむせび泣くように歌い、

曲もはらわたもずたずたに断たれる。

また笛を聞いて、「解蹀躞」を贈って言いました。

金谷園キンコクエンの楼の中ウツロにいる美女は、

黛をさした二つの眉をひそめている。

雲に叫び月を刺し通すかのように、

楚山ソウザンの竹の笛を吹きならす。

恨みを断たれ憂い思い起こすのは誰のこと。

宴席ウツロにいる旅人は、

まだ覚えていて、

平陽ヘイリョウの宿ヤドで笛を合わせてくれたことことを。

涙が目にあふれ、

のどを転がす歌声が続く。

杯をとどめて聞いても足りない、

天空を吹く風か海に逆巻く波か昔の曲をすべて披露する。

夜は更け 靄も雲も悲しみ憂わしげ、

あなたに頼んで酔いに沈み、

あした見よう、

梅の梢の玉のような花を。

二十三、楊无咎のくつの詠物詞

革靴の杯を詠じたのは、楊維禎ヤウイテイ(号は鉄崖テツガ)が最初だと皆言いますが、

調べてみますと楊无咎の靴を詠じた「蝶恋花」がすでに次のように述

べています。

端正で細くやわらかくて玉を削ったかのよう、  
細い靴下 弓のような靴、

柔らかな肌着は呉の薄い絹織物。

掌にのせて仔細にながめやっつと片方を手に入れた、  
こっそり盗み無理やり奪って春を酌む。

たおやかなその身は軽やかにしとやかで、

ひそやかに歩みを進めれば、

香りのよい塵が立つ心配もない。

試みに尋ねてみる いったい誰がこんな足をしているか、  
月の女神の姪のほかに。

## 二十四、高観国こうかんこく

高観国（字は賓王、号は竹屋）が史輔しほ之の宴席にいた時のこと、雲頭  
香を捧げて詞をねだった歌姫がおりましたので、「生查子」を作つて  
やりました。

蓬萊で雲をちよつとつまむと、

龍涎香が骨まで染みこむ。

風味は高く芳しく、

柔らかに艶やかに笑って話す。

花のような顔は愛らしく 黒髪は冷たく、

酒はその清らかな歌の怨みが集まったかのよう。

翠のカーテンにはもう霧が濃い、

銀の燭台の灯心を切るのほ もうやめてくれ。

またある人のかわりに西湖せいこの歌手を悼んで、「喜遷鶯」を作つてい  
いました。

歌声は凄まじく怨めしげ、

何度も春を見送ったのに、

春が知らん顔だから。

緑の葉に感じ 紅い花に心をいため、

鬨に眉をひそめ 月に啼くのは、

ずっと春に悲しめられたから。

玉のような体は一握りもないほどにやせ、

白粉を溶かした涙はたつぷりの愁いに千々に散り落ちる。

哀れなのは、塵にまみれ白粉の虫に食われた、

舞の衣装と歌の扇。

目を転じればこの世の夢は断たれ、

峽谷に雲は帰り、

春風のようにだったその面影を空しく思うのだ。

燕子楼しんろうには誰もいない、

鏡台は冷たく光り、

湖のむこうの青い山が彼女の眉のようになだらかだ。

さらびやかな街に悲しいその名は残るけれど、

寶石に飾られた小箱の返魂香は遠く手が届かない。

この思いは苦しくて、

水に流れる落花に、

再び会えるのはいつのことだろうかと尋ねる。

また次韻して妓楼で弔い、「永遇楽」を作つて次のようにいきました。

淡くぼかした眉、

うっすら紅を残した頬、

戸の隙間からこっそりのぞいていたのを覚えている。

香炉に煙はなく、化粧箱にも何も無い、

塵が階段にひんやりと積もり、

手紙を携える青い鸞を呼んで舞わせることなど誰ができればよいか。

春の風は花の便りを運び、

秋の宵には月に約束し、

はつきりと心を許し合った仲だった。

恨みを含み千年の怨みは結ばれ、

玉の骨はまだ土にはなっていないはずだ。

木蘭の舟、

棹をこいだ美女の莫愁はどこにいるのだろうか。

寒々とした川辺のもやにつつまれた木にゆらゆらと繋がれている。

事は雲を追いかけて隠れ、

情は帯玉に付いて冷たく、

今と昔とに分かれたことを夢に知った。

一杯の酒では夜ははるかに長く、

ぼつんと灯る光では明るく照らすのは難しく、

どれほど人の腸を砕くことか。

空しく悲しむ、細かい雨が混じる西風が、

すっきり涙を吹いて行ったのを。

## 二十五、姜夔が范成大に贈った詞

范成大(号は石湖居士)が引退してからのある日のこと、姜夔(字は堯章)が雪の中を訪問し、何ヶ月も滞在したことがありました。折

しも湖の野梅が花盛りとなりましたので、范成大が筆をやって詞を作らせ、あわせて新曲をもとめましたところ、姜夔が特別に作って献呈した二曲は、自ら作曲したものでした。范成大はいつまでも愛で、自分の家の歌の上手な芸妓に練習するよう命じましたところ、音曲は調和して柔らかく、「暗香」「疎影」と名づけました。その「暗香」には次のようにいいました。

昔のままの月の色、

何度照らしたことが、

梅のあたりで笛を吹く私を。

玉のような人を呼び起こして、

寒さもかまわず一緒に摘みとらせた。

何遜のように美男だった私も今はだんだん年老いて、

春風の中で筆を手に詞を作ることもすっかり忘れてしまった。

ただ怪しむことができるだけだ、竹の向こうの疎らかな枝から、

ひんやりとした香がこの玉の席に入ってくるのを。

水辺の国は、

まさにひっそりとしている。

送ろうにも道は遠く、

夜中に降った雪が積もったのを嘆く。

翠の壺の酒はすぐになくなり、

紅い花は何も言わず、目はさえて思い出される。

ずっと忘れない、むかし手を取り合ったときには、

千本もの梅が寒々とした碧の湖面にくずれかかるようだったが、

またひとひらひとひら吹き尽くされてしまえば、いつ見ることができようか。

その「疎影」にはこういいました。

苔むした枝に綴られた玉、  
小さな翠の鳥が、

その枝で一緒に宿っている。

旅路で出会えば、

かきねの角で黄昏に、

黙って竹に寄り添っている。

王昭君は遠い砂漠に慣れることなく、

江南と江北とをただひそかに追憶する。

帶玉を鳴らして月の夜に帰ってきて、

このひっそりとひとり咲く花になったのだろうか。

今もなお覚えている 奥深い宮殿での昔の事、

姫君が眠っているうちに、

飛んで緑の眉に近づいた。

春風が、

その美しさもかまわず散らさせないように、

急いで金の部屋に置いた。

それなのにひとひらを波に流れ去らせて、

またも却って龍笛の哀しい「梅花落」の曲を怨むのだ。

その時を待って、もう一度かすかな香りを尋ねたら、

もう小さな小窓の横幅の絵に入っていた。

范成大の家の歌の上手な芸妓では小紅が一番で、姜夔は彼女にとても目をかけていました。姜夔が帰郷を告げますと、范成大はすぐに小紅を贈りました。帰りの船が深夜に垂虹を通り過ぎた時、おりしも大雪に遇いました。姜夔は小紅に新しい詞を歌わせ、自分は笛を吹いて

それに合わせ、詩を作りました。こういうのです。

新しい詞の響きの最高に愛らしいのが 自分でも好ましい。

小紅が小声で歌い、私は簫を吹く。

曲が終わる頃、松陵の道を通り過ぎ、

振り返れば もやにかすむ波 十四の橋。

姜夔は、「滿江紅」の古い詞はどれも仄韻を用いているが、多くは曲調に合わないから、平韻を用いて協うようにするべきだと言っていました。たまたま巢湖に船を出したとき、風が無くて困り、「もし風を得ることができましたら、平韻の「滿江紅」を作って神女を言祝ぎましよう」と黙って祈りました。祈り終わると、風が帆をふくらませて走り出し、たちまち渡り終わり、詞もできあがりました。こういうのです。

仙女が来る時、

まさに見渡す限り広く翠の波が広がった。

旗が乱れ飛ぶ雲とともに降りてきて、

前の山に身を寄せた。

金のくびきを付けた竜たちに車を引かせ、

玉の冠を付けた妹たちに従わせる。

夜の深まるなか風は止まりひっそりとして人も無いのに、

帶玉の鳴る音が聞こえる。

不思議な場所、

君見てごらん。

淮水の南にあって、

江南を守る。

詩余ものがたり 南宋篇(二)

六匹の雷電を遣わして、  
別に東の関所を守らせる。  
可笑しいのは、英雄に敵う者はおらず、  
漲る春の川水が曹操を敗走させたこと。  
又どうして知っているだろうか、彼女が小さな紅い楼閣の、  
簾のかけにしていることを。

二十六、姜夔が張仲遠に贈った詞

姜夔は、呉興の張仲遠の家に行きました。仲遠はしばしば外出します。その妻は文字を知っていましたが、とても嫉妬深く、客人が手紙を寄こすたびに、こっそり開いて読み、夫の行動を探っていました。そこで姜夔はふざけて「百宜嬌」を作ると張仲遠に送りました。次のようなのです。

見てごらん 庭に立ち並ぶしだれ柳、  
水辺の杜若、

打ちひしがれて目も向けぬ。

馬にまかせて青楼に行くと、

簾の奥深く、

たおやかな彼女は趙飛燕のように素晴らしい。

みどりの酒壺をともに酌み交わし、

艶やかな歌を聴けば、彼の心がまず動く。

そこで手を取り、月に照らされたもやに濡れる階段のあたりで、

ほんのりと暖かな良夜を愛でる。

無限の風流は思いのまま、

こっそりとその細い靴を隠し、

ひそかに香りよい手紙を送る。  
翌日渡し場の太鼓を聞くと、  
湘江のほとり、人を誘ってまた春のともづなを解く。  
乱れ飛ぶ紅い花びら、  
もやに包まれる水面は遙か遠く、悲しみに沈む。  
またどうして似ているだろう、手をつなぎ、  
一艘の小船にのり、  
いつまでも見つめ合うのに。

張仲遠が帰宅すると、その妻は詰め寄って、弁解も聞かず、ついに張仲遠の顔に傷跡を残したので、客と話すことも出来なくなつたといふことです。

二十七、劉克莊

劉克莊(字は潜夫)は揚州の陳師文參議の家で、素晴らしく美しい舞姫に会い、彼女のために「清平樂」を作って次のように言いました。

しなやかな腰には白絹をまとい、

軽々と舞い上がることができる。

避風台を築いてしっかり守り、

驚いた白鳥のように飛び去らせてはいけない。

香玉のように香り柔らかな肌、

笑っても眉をひそめても風流。

恋しい男と目で語り合うのに夢中で、

伊州の舞を間違えたのに気づかない。

## 二十八、周必大

周必大(号は平園老叟)が使節として旅をして池陽を通りますと、趙富文知事が宴席に招待してくれました。曹盼という官妓は、色白で静かに黙っておりましたが、吃音があつて気が利きません。周必大はいじらしく思い、(「点絳唇」で)思いを梅に詠じました。

白い江梅を見に行くと、

どれも玉の粉か酥が固まったかのよう。

雨にふくらみ霜に被われ、

優美な女性はおろかなもの。

許してはいけないよ 冬が深まり、

雪がおしつぶし霜がいじめるのを。

君は知っているか。

彼女が痩せるのを心配するばかりか、

彼女が苦しむのも恐れている。

七夕になりますと、趙知事はまた宴を開き、家妓の小瓊を席に出してお酌をさせましたので、周必大はまた詞を作って贈りました。次のようなのです。

秋の夜いかに乗って、

まろうど星は織女のいる渚にたやすく到着した。

かすかにまなざしを向け、

牽牛のお越しかと思つたようだ。

詩余ものがたり 南宋篇(二)

会ってみるとなんと違つたが、  
霓裳の舞を舞ってくれた。

間違ひなく、

何年かに一度お目にかかるが、

この周の訪れを訝らないでほしい。

小瓊は、韓元吉(字は無咎)・晁伯如の家の歌姫と合わせて三傑と、范成大が賞賛した者です。

## 二十九、韓元吉

李英華は、開封の李長卿の娘でした。美しく賢く文章を作ることができました。元豊年間のこと、李長卿は縉雲の長官となり、英華もついて行きましたが、すぐに病気に感染して亡くなり、そこでその町の三峰閣に納棺して安置しました。宣和年間、青溪で騒乱が起こり、町は兵火に遭い、三峰閣だけが残りしたので、県の主簿の仮の役所とすることにしました。

南渡の後、済南の王伝慶が縉雲の主簿となり、親戚の曹穎も一緒に連れて来まして、役所の東に住みました。ある晩、扉をたたいて入ってきた女性と語り合いましたが、世俗のつまらない話はしません。名前を尋ねますと、「前の県令李長卿の娘で、名は英華、字は秀華と申します。長年穀物を断つております。貴方とは宿縁がありますので、おそばに参りました。」と言います。一日として欠かさず二人は唱和していました。おりから曹穎が従軍することになり、英華は別れを告げて言いました。「私と貴方の縁は尽きました。けれどもこの旅には兵難があるでしょう。霊香を一片差し上げますから、身に危険が迫った時、焚いて告げてくだされば、かげながらお守りすることができます。決して忘れないでください。」曹穎はその言葉の通り、そ

詩余ものがたり 南宋篇(二)

のち敵に捕らわれましたが、慌てていて香を焚くのが間に合わず、とうとう難に遭ったということです。その時、予知することができた英華は、鬼仙になったといひます。韓元吉は彼女のために〔水龍吟〕を作つて次のように言ひました。

雨上がり 重なる峰々が空に浮き、  
望み見る素晴らしい景色は仙都かと思われる。

仙人が住むという洞天はまだ閉ざされず、  
人の住む世界では春も終わろうとするころ、  
かつて仙女が降りたつたという。

錦に飾られた瑟の琴に張られた沢山の糸が鳴り響き、  
鳳簫は清らかに響いて、

九天に歌い吹き鳴らされる。

霊香を分け与えたという昔の出来事、  
彼が去つたあと、

誰が一緒に、

風の中で酔つてくれたのかと尋ねる。

振り返ればもやは千里を閉ざし、

紅い花びらがはらはらと洗うかのように舞い落ちるばかり。

傷つきやすければ 年老いやすい、

恋文を届ける青い鸞鳥はどこにいるのか、

できあがつた詩は誰に届けようか。

北斗星は回り 唐鋤屋は横たわり、

半分巻き上げた簾には花影、

溪川には冷たい水。

かもは遙かに飛び去り、

雲は過ぎ 夢は遠く、

みどりの三峰があるばかりなのを悲しむ。

この後の閣に住む者もしばしば会うことがありました。ただ、彼女が来る時には、まず稀なる香が漂うのです。ああ、なんと不思議なことでしょう。調べてみますと、『英華集』三巻は『文献通考』にその名が見えますが、今では伝わりません。

三十、姜夔が張枢に贈つた詞

張枢(字は斗南)が幼い歌姫を家に納れたといふので、姜夔は戯れに〔少年游〕を作つて贈りました。次のようです。

二つのまげをまだ一つにもできない短い髪、

二つの眉をまずひそめる、

家は青い雲の西。

母に別れる思い、

夫に従う味わい、

桃葉のような美女が川を渡つて来る時。

小船に乗つて慌ただしく旅立ち、

今夜は前の溪に泊まる。

柳は渡し場に揺れ、

梨の花が垣根の向こうに咲き、

心の内は二人が知っている。

三十一、蔣捷が妾に贈つた詞

蔣捷(字は勝欲、号は竹山)は一人の妾を買つたことがありまして、

雪香と名づけ、彼女のために〔瑞鶴仙〕を作つて次のように言いました。

ました。次のようなのです。

白い肌はもとより雪、

雪の中に香りを帯びて、

さらに素晴らしさを添える。

梅の花のように孤独にきよらか、

梨の花は何に似ていると問われても、

そのすがたは言葉にできない。

長い洲にゆらゆらと棹さし、

おしどりの浮かぶあたり、麗しい姿をふいに手折る。

美しい窓に向かつて自分で薄物を仕立て、

愛おしげに淡い薄絹を軽くたたむ。

清らかそのもの、

まげの付け根に 翠のほくろ、

龍の口で玉の涎を吸い、

何もかも虚しくなる。

かすかに酔つたようにあかくなり、

窓辺の灯は暗く、明滅する。

仙界の銀台の高いところ、

よいかおりの帯玉をつけて、

幾万のすじ雲の上を歩いていると思つていた。

目覚めれば、彼女は紅いとばりの中、

廊下の半ばあたりまで月がさし込んでいる。

三十二、蔣捷が妓女に贈つた詞

琵琶の演奏に優れた有名な歌姫のために、蔣捷は〔賀新郎〕を作り

私は琵琶の楽譜を持っている。  
金に輝く楽器を抱え、おもむろに左手で棹を揉み軽くはじけば、  
柳の梢の鶯も嫉妬する。  
羽調の六を弾き終わると、  
花の下でひそかに心を通じ合う。  
どうして叩き砕けようか、玉のかんざしの細い根元を、  
低い絵屏風が深く朱い門を掩い、  
巻き上がる西風が、地面一杯に土ほこりを巻き上げる。  
かぐわしい出来事は行つてしまい、  
蝶が空しく訴える。  
日ごとに私の美しい心を誤らせ、  
小さな楼の東、隠れているのは誰、  
鳳の簫鼉の太鼓。  
翠に染めた襟や両袖に涙がしたたり、  
高い竹が凄まじく、またも暮れていく。  
灯を暗くして、ひっそりと情を交わす。  
帯玉を中州のあたりに投げ捨ててスカートで一足一足歩む、  
はてしなくはるかな、相思の苦しみ。  
春は去り、  
紅い花びらが乱れ舞う。

昔の歌姫の潘姫のことを話す客がおりまして、そこで〔柳梢青〕を  
作つて言いました。

少し飲んで小さく吟じる、

詩余ものがたり 南宋篇（二）

詩余ものがたり 南宋篇(二)

消えかけた灯火 途切れ途切れの雨、

静かな門 暗い窓。

幾度 花は咲き、

幾度 花は散った、

またもたそがれる。

潘娘は潘郎を誤らせた、

心に思えばきつと鬢を霜が貼り付いたように白くしたに違いない。

オウムの籠は空っぽ、

オシドリの壺は割れ、

雲と霧とがはるかにぼんやりと広がる。

三十三、蔣捷の西湖の詞

傅岩隱は武林にいたとき、浴室の徐氏の娘を客楼に納れました。帰りますと、自宅の楼に住まわせ、四方の壁にはすべて西湖の素晴らしき風景を描きました。蔣捷を招いて彼女のために「玉漏遅」を作ってもらいました。次のようなのです。

翠のオシドリは二つの穂の間で冷たく浮かぶが、

鶯の声が転がるように響くと、

春風がかぐわしい風景に吹く。

湧き立つような花が袖に香り、

このたびの徐妃の化粧はひとえに心になかう。

水と月と 仙人の住まいか、

四面の西湖は、鏡のよう。

もやにかすむ山の端は暗く、

指に見誤る細く白いネギのような、

蓮花峰 風篋嶺。

思うに小さな建物で始めて会ったとき、

紅い獅子の香炉をきままにたたいて歌い、

舞う袖は金の月を飛ばしたに違いない。

楼に月が斜めに寄りかかる頃、

秘かに逢瀬の日を何度も確かめた。

様々に軽やかに笑いながら語り、

さらに一つ、やさしい心を添える。

かんざしを整えるのにも飽きて、

輝く灯火をそむける美しい姿。

三十四、李南金

李南金(字は晋卿)は自ら三溪の水雪翁と号しました。ある良家の女性が可哀想に落ちぶれてさすらっているのに感じるどころがありません。して、「賀新郎」を作っていました。

落ちぶれ流浪して今ではこんな有り様。

私もまた三生の杜牧、

秋娘のために詩を作ろう。

もとより愁いも多く感慨も多いのに、

さらに江南の春の暮れに行きあうとは。

君見てごらん、舞い落ちる花 飛ぶ柳絮。

吹かれて刺繍で飾られた戸をくぐり抜け、

風に吹き落とされて塵と土とにまみれる。

世間の事は、

すべて頼みにはならない。

佳人は薄命 君訴えるのはやめよ。

英雄の心を説けば、

一生は佳人よりも更に苦しい。

酒を前に今日の思いを尽くそう、

女部屋で美しく眉を描いていたことは忘れよ。

ただ春が、私の家に来て、

おぼろな月が御簾一杯に光る明け方、

翌朝には、燕がまたいなくなるかと心配だ。

鶯には留まってくれるよう、どうしても頼みたい。

その悲しみを感じてため息が出ます。李南金はまた自分も落ちぶれて流浪している思いを詠じたのでしよう。

### 三十五、戴復古の妻

戴復古(字は式之、号は石屏)がまだ不遇だった時、江西を旅しておりますと、金持ちの主人が彼の才能を愛して、娘と結婚させました。しばらく滞在し、戴復古はふと郷里に帰りたくなりました。妻が問い詰めますと、自分を娶ったからだと言います。妻がこのことを父に告げますと、父親は激怒しました。妻はおだやかに説明し、最後には夫を帰らせ、化粧道具を贈り物にしました。そのうえ次の〔祝英台近〕詞を作っておりました。

豊かな才能を惜しみ、

幸せ薄い運命を悲しんでも、

あなたを引き留める役には立たない。

もみしだかれた花の便箋に、

詩余ものがたり 南宋篇(二)

耐えて悲しみの言葉を書く。

道のかたわらの柳はしなやかに、

幾千万の枝を揺らす。

でもこの悲しみの一分にも当たらない。

どうやって訴えよう。

今生の縁を断ち切られれば、

この身はもはや価値もない。

月に誓ったのは、

夢の中の言葉ではないのに。

このちあなた再び来たならば、

忘れないで、

酒を手に取り、

私の墓に注ぐのを。

戴復古が去った後、その妻はすぐに水に身を投じました。ことわざ「多情な女が不実な男に会う」と言いますが、戴復古のような者は、本当の不実な男ではありませんか。